

明暦の大火 消防の図

江戸時代初期の消防は火を消すことよりも延焼を防ぐ点に重点を置く、いわゆる破壊消防であった。この2枚の木版画は明暦の大火（俗に振袖火事）における消防の様子で、おそらく江戸の火災を描写したもっとも古いものであろう。はしご・高張じょうちん・さすまたなどを持った大名火消が出動している。蛇の目の円板に長い柄をつけたものは大うちわで、これで火をあおぎ返そうとした。強風下の火災を防ぐにはあまりにも貧弱な装備である。事実、明暦の大火では消防隊の活躍はほとんど見られなかった。

明暦3年（1657）正月18日の昼過ぎ、激しい北西季節風が吹きまくるさなか、本郷の本妙寺より出火、たちまち湯島・駿河台・鷹匠町・鎌倉河岸に火があふれた。夕刻になると風は西に変わり、火の手は八丁堀方面をなめ尽くした。海辺の靈巖寺では数千の死者が出た。西風はますます吹きつゝのり、神田明神や西本願寺が炎上した。やがて猛火が小伝馬町の牢獄に迫ったので、囚獄の石出帯刀は囚人を解放した。囚人たちは涙を流し手をあわせて喜んだ。ところが、この帯刀の決断が誤解されて、囚人が逃亡したといううわさになった。そのため、浅草門が閉鎖されて逃げ場を失った大群衆が煙にまかれて死んだ。この日の火災は、翌日の午前4時ごろ、やっと鎮火した。

19日午前10時ごろ、小石川伝通院表門下の新鷹匠町大番与力の宿所より出火、激しい北風に乗って吉祥寺や小石川の水戸屋敷を全焼し、その火は堀を越えて江戸城に入った。天守閣や本丸・二の丸の焼失はこの時のことである。午後4時になると、また風向が西に変わった。おかげで江戸城内

の紅葉山や西の丸は焼失を免れた。かわりに火の手は下町を直撃し、京橋付近では火に囲まれた人人が大勢焼死した。そして、さらに新橋や鉄砲洲まで延焼して夕方に至って鎮火した。

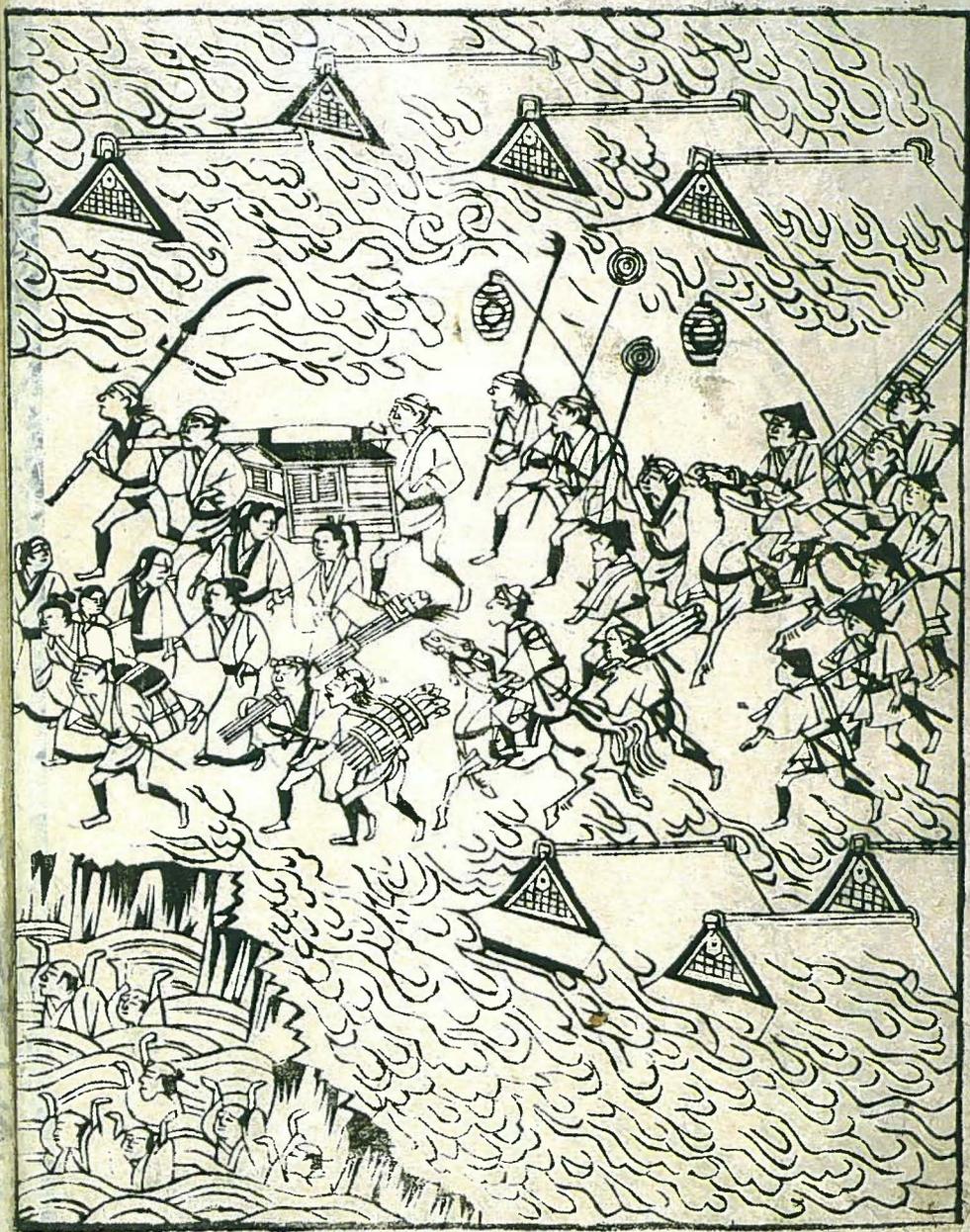
一方、午後4時ごろ、麴町5丁目の町家から発した火は、桜田方面から愛宕下にかけて大名屋敷100か所以上を灰じんにした。山王権現もこの火事で災した。さらに海岸にも燃え広がって下屋敷18か所が壊滅。午前2時には増上寺に火が入ったが、幸い風が静まっていたので主な建物は事なきをえた。こうして20日の未明までに江戸の大半が焼失、死者も10万という未曾有の惨事となったのである。

『むさしあぶみ』は、この明暦の大火の様子を活写したものである。上下2巻を通じて15枚のさし絵があり、火災の状況や逃げ惑う群衆の姿を一種の雅味をたたえた筆法で伝えている。

古来、火災を詳述した記録は意外に少ない。さらに、その記録を文芸化したものとなると、きわめてまれである。『むさしあぶみ』はその稀少な作品の一つと言ってもいいであろう。この書は万治4年（1661）、京都で板行されている。執筆者の名はどこにも記されていないが、北条秀雄氏が浅井了意の作品と主張して以来、それが定説になった。了意は博覧強記をもって知られた仮名草子の作者で、代表作には『江戸名所記』『東海道名所記』『御伽婢子』などがある。了意の生涯は不明なところを残しつつも次第に解明されている。しかし、このさし絵画家については一切が謎に包まれたままなのである。（黒木 喬）

関連記事は本文44ページ

甲の別々の舟もたつたりしつゝあ



舟もたつたりしつゝあ

三